平成十年七月二六日（日）

第二五六回　史跡めぐり　資料

海を渡って　横浜は
チャイナタウンと博物館

越谷市郷土研究会

平成十年七月二六日（日）

第二五六回　史跡めぐり　資料

会員だけの暑気ばらい

海を渡って　横浜は

チャイナタウンと博物館

集合　午前七時四十分・越谷駅東口

コース　越谷駅＝牛田駅＝船橋駅＝

（バス）＝劇場前…ララポート乗

船場～快速双胴船にて海ほたる、

ベイ・ブリッジを見ながら～横浜

大さん橋…中華街…開港資料館…

県立歴史博物館…関内駅＝横浜駅

＝（京急・都営）＝浅草駅…浅草

駅＝越谷駅　（解散）

食事　中華街にて各自　弁当は山下

公園にて

参加費　５，０００円（交通費・資

料代等）

案内者　幹事・宮川　進

海老川橋

そこう西側からながめると浅間を左に見て、地元の人たちのウォールペインティングが続く道を北へ高速道路を越えて行くと、船橋港に流れ込んでいる海老川の河口が見えてくる。その河口に架かるのが船橋港だ。海老川沿いにさらに北へ進むとやがてJR船橋駅、京成船橋駅から船橋大神宮にいたる賑やかな通りに出つかる。海老川橋はそこに架かる。

橋は欄干にへさきがついたユニークな形をしているからすぐわかる。ヤマトタケルが東国征伐の途中立ち寄り、橋がなかったため、今の海老川橋の場所で始をつないで橋の代わりをしたといわれ、これが船橋の地名となったという。この故事に基づいて、昭和61年の河川改修時に橋も今の形に造られた。デザインは市内在住の彫刻家、へさきの部分に故郷愛平氏の手形とともに由来が書かれてある。

橋の架かっている通りは成田へ行く街道で、船橋大神宮の門前町でもある。昔の面影が残っているので、ぶらぶらしてみるのも面白い。

↑公平に作られたへさきの手形とたもとにコメントが書かれている橋

↑橋の欄干にはこの由来が書かれている

船橋大神宮

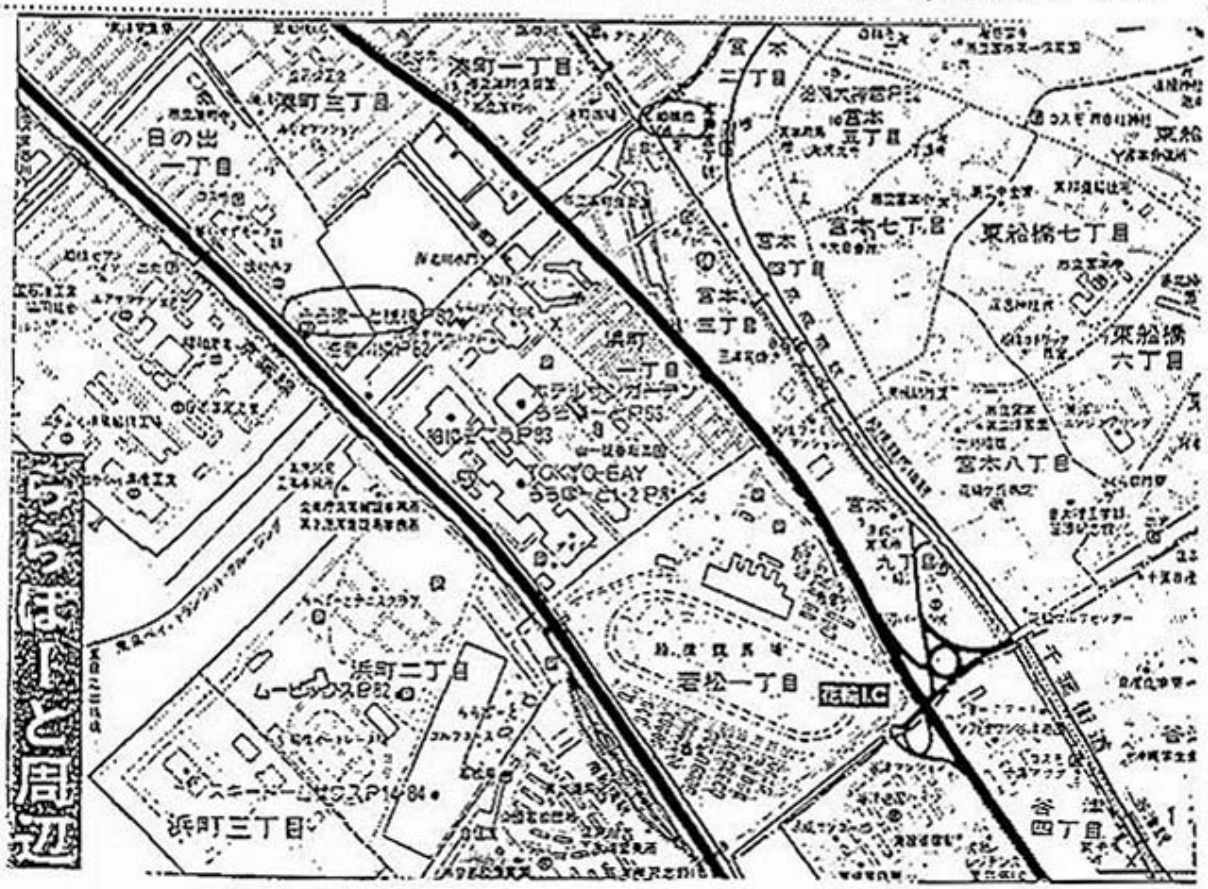
海老川橋から徒歩約2分ほどのところに船橋大神宮がある。『延喜式』にも名前の見える古社で、正式には若宮八幡社といい旧郷社。

第12代景行天皇の40年、東国征伐の途中この地にたどり着いたヤマトタケルが、天照大神を祀ったというゆい伝がある。そして徳川家康の関東入国とともに50石の土地が寄進され、将軍の代参が行われたこともあって船橋第一の格を誇った。現在も船橋駅に最大の神社である。

↑さまざまで知られる船橋大神宮。ヤマトタケルにまつわる伝説も伝わるという

↑江戸時代には相撲の興行も行われた

神社のある場所は浅間山という小高い丘で境内は散策自由。この境内の一角に明治13年に建てられた浅間山灯明台がある。1・2階は和風で宗教さ、3階は6角形の洋風という擬洋風建築で高さ14mの石灯台は船橋の重要な目印となっていた。内部は非公開だが外からでも一見の価値がある。



東京湾横断道路

東京湾をはさんで東京都に隣接する神奈川県川崎市と千葉県木更津市を海底トンネルと海上橋で結ぶ全長一五・一キロの自動車専用有料道路。第三セクターである「東京湾横断道路株式会社」によって一九八九年（平成元）五月に着工し、九六年（同八）三月の完成を目指す。総工費一兆五〇〇億円を投じる大事業だ。

この構想は最初、一九六一年（昭和三六）に浮上し、翌年から建設省が湾岸道路、横断道路、湾口道路を併せた東京湾環状道路（総延長一八五キロ）として調査を開始。八七年（同六二）環境影響評価書（アセスメント）も作成されて着工が許可された。

それによれば、横断道路は川崎市川崎区浮島町から九・一キロは海底トンネル、木更津市中島から四・四キロは長大橋を架け、その結節点には六・五㌶の人工島を造成する。設計速度は時速八〇キロ。このような変わった形となったのは東京湾の川崎側が水深も最大二八・四㍍と深いうえ、我が国で最も船舶の往来が激しい（一日平均一六〇〇隻）〝海の銀座〟であるのに対し、木更津側は船舶航行も比較的少ないうえ、海岸寄り一・五キロは水深二㍍より浅い平坦地を成しているからだ。

トンネルは直径一四㍍（三車線用）を二本（将来は三本）で船舶、漁業、環境への影響が少なく将来の追加工事もやりやすいとしてシールド工法を採用。トンネル中間地点には高さ海上五㍍、底面水面マイナス六四㍍、直径二〇〇㍍の人工島をつくって工事中はシールド掘進機の出し入れに、また完成後は換気塔として利用する。

一方、橋梁はこのあたりが日本有数の地震多発地帯であることを考え、また漁船の通過を可能とするため、基礎地盤を海面下二〇～五〇㍍と深くしたり、橋脚を高くするなどの工夫をしたりで、「世界にも類のない難工事」（岡昭・東京湾横断道路社長）という。

横断道路は有料で開業時、一回様自動車三五〇〇円、普通車四九〇〇円、大型車七四〇〇円、特大車一万七二〇〇円と高めにセットされているが、それでも当初一日当たり三万三〇〇〇台、二〇年後六万四〇〇〇台が利用するという。理由はその便利さだ。この道路を利用すると横浜―木更津間が以前の陸路三時間一七分から五〇分に、東京―木更津間は二時間二五分が五三分へと大幅短縮される。神奈川―千葉両県の往来に東京都心の渋滞道路を通過しなければならないという不便さから解放される。これにより東京―千葉・市原間や都内の交通量は一日当たり二～三万台減少し、混雑緩和に大きく役立つという（同道路と同じルートにはフェリー便があるが、所要時間は七〇分）。

また同道路は東京湾岸道路、東京外郭環状道路などと一体となって首都圏の環状道路網を形成し、首都圏各都市間の連携を強めるとともに、二一世紀に向けて首都圏地図を新たに書き換える役目も果たすものとみられる。専門家グループの予測などを参考にしてもう少し具体的にいえば、用地難や人手不足などで発展が頭打ち状態となっている世界有数の先端技術を誇る京浜臨海工業地帯は、房総地域と直結することによってさらに発展。房総半島内陸部の緑豊かな土地が京浜のベッドタウンとして提供されるようになる一方、南房地帯は都民にとって湘南と同じ位アクセスに便利なマリンスポーツランドとして発展しそう。同道路自体も絶景を眺めながらのドライブコースとなり、途中の人工島はホテルや水族館その他の施設ができて新たなレジャースポットとして登場する。これまでお互いに遠隔地だったのが接近する結果、八王子―厚木―京浜―木更津―茂原―成田などが互いに通勤圏になり新興ベルト地帯を形成するかも知れない。日本道路公団では、二一世紀初めの南関東全域の生産額は同道路の出現で年間五・一兆円、地方税収〇・二兆円アップすると試算する。横断道路の日本経済への寄与はこのように極めて大きい。

しかし東京湾横断道路にはバラ色の夢ばかり語られているわけではない。クリアーしなければならない問題の多くは環境面からの指摘だ。同湾のように入り口が狭く奥行きが広い閉鎖水域では、それでなくとも小さい水流が橋脚などの障害によっても妨げられてしまい、海中の酸欠状態が加速するという。東京湾が死んでしまうという心配だ。また一日に三万台が通過する場合、出入り口となる川崎と木更津の騒音や排気ガスによる汚染が深刻な問題にならないだろうか。さらに巨大地震にどれだけ耐えられるのだろうか。漁業が壊滅するのではないだろうか。

番望と心配、どちらも大きい。

斜長橋は東京湾の竪琴——ベイ・ブリッジほか

長大橋としての斜長橋は、世界的な流行となっており、その中心は西ドイツである。

第二次世界大戦中、ドイツの守りはライン河にかけていた。一九四五年三月、ヒトラーの両面戦線の誤算は西部戦線において総崩れとなり、ライン河の橋はレマーゲン鉄橋を除いてすべて爆破された。

橋にとって戦争はロマンを生むが、最大の敵でもある。西ドイツではこの戦争によって一万五〇〇〇の橋が破壊された。戦後の復興期、一九五五年から一九七四年にかけて、材料利用の効率性と架設の迅速性によって、約六〇の道路橋が斜長橋で、ドイツ復興に大きな役割を果たした。

前述ライン河のデュッセルドルフ市だけでも、テオドールホイス橋、オーバーカッセル橋、クニー橋といったユニークな斜長橋があり、その外クルト・シェーマッヘル、フリードリッヒ・エバート橋、ケルン市のゼベリン橋は名橋として知られている。

とくにテオドールホイス橋はライン河の最も古い斜長橋（一九五八年完成）であり、四本の単核塔が対称に配置され、平行形式の二面ケーブルは近代斜長橋の原点といわれるほどである。

構造形式の原理は、すでに一六世紀の古書に図があり、一八～九世紀には木製や鉄製の架橋がなされたが、そのほとんどは落橋。今残るのはロンドン・テームズ河に架かるセントアルバート橋だけである。

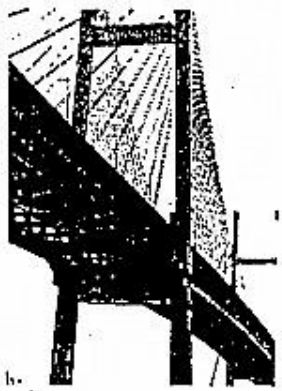
斜長橋の力学的構成は高い塔からケーブルにより、主桁だけでは支えられない荷重を補強したもので、近年の斜長橋は従来補助材だったケーブルを引張材として使い、主桁の負担を軽くし長大化を可能にした。

フランスのサン・ナザール橋（一九七五年竣工）は当時、斜長橋として最長の四〇四㍍を記録。一九八九年には瀬戸大橋の櫃石島、岩黒島橋が四二〇㍍を超え、一九八九年には中央支間四六〇㍍、二層構造の斜長橋としては世界最長である横浜ベイ・ブリッジが竣工した。

斜長橋は、架橋地の条件によって、塔、ケーブル配置が一面あるいは三面。両方面から放射状、平行、一本、多本のケーブル。塔も単柱（三本柱）、A型、門型など、その配置も対称、非対称、斜めに立てられる。

〈横浜ベイ・ブリッジ〉

一九八九年（平成元）九月、横浜博覧会開会中には二七日の開通に先立ち、ベイ・ブリッジがライトアップされて夜空に浮かび上がった。



ベイ・ブリッジ

照明は日没から午前二時まで、主塔三基と橋の下面を照らし、午前零時までは毎時五七分から十分間、フィルターを通して橋をブルーに染め、時を知らせる。

本牧埠頭と大黒埠頭に架かるベイ・ブリッジは全長八六〇㍍。二層の上部は高速湾岸線、下層は国道三五七号、いずれも六車線、定速走行およそ七分で通過する。設計荷重は二〇㌧車より重いトレーラーでの荷重を配慮してある。

主塔の高さは一七二㍍、日型で上部内側がやや狭まっている。構造物として、マリンタワーの一〇六㍍をしのいでおり、ケーブルは一一段の放射状のマルチファンタイプの二面吊りである。

橋げたはワーレントラス、流面からの高さはクイーン・エリザベス二号の入港可能な五五㍍を確保している。

工事は一九八一年（昭和五六）着工、工事費八〇〇億円。使用鋼材は約五万四三〇〇㌧は東京タワーの一三基分に相当するという。

基礎構造物の一部は、陸上のヤードで製作、現場で継ぎ合わせる工法も注目を集めた。

横浜ベイ・ブリッジ

本牧埠頭から大黒埠頭を結ぶ全長860mのベイブリッジは、斜張橋としては世界最長。その雄姿は横浜のシンボルと呼ぶにふさわしい。橋の上からの景色もすばらしく、日中には青い海に船がゆったりと行き交う様子が、夜には港独特のオレンジ色のライトに宝石をちりばめたような夜景が楽しめる。この見事な光景を車で行かなくても見ることのできる場所がある。それがスカイウォーク、橋に併設された日本初の展望施設だ。大黒埠頭側の入口からスカイタワーに上ると、橋の両脇にスカイプロムナードが延びている。長さ320mのこの道では海上の空中散歩が楽しめる。橋の大黒埠頭側の主塔に設けられたスカイラウンジは、外径32mの円形展望施設。ここからは他のどの展望スポットとも違う360度の横浜港の大パノラマが楽しめる。☎506-0500 ⏰9時～21時（11月1日～3月31日は10時～18時） ¥600円

メリケン波止場として親しまれた大桟橋

わたしは初めての外国人を案内するときは、山下公園だけでやめないで、必ず大桟橋まで連れてゆく。そのさいあらかじめ明治時代から現代までの横浜の地図を用意しておいて、地図を見せながら横浜の成立史を話すと、大抵の人がいっぺんに理解するようだ。

公園の西北隅までいってインド式水呑場を見せてから通りに戻ると、いまは海岸通りでも古びてしまったシルクセンターの建物の前に「英一番館」とある標識に注目してもらう。

「ここにジャーディン・マセソン商会という英国系の大きな貿易商社があって、それを英一番館と呼んだ。そしてここから山手に向って二番、三番、四番と外国人居留地が始まっていたのです。」

そしてたとえば慶応元（一八六五）年刊行の外国人向け地図「Plan of Yokohama」をひろげて、黄色と紫色に塗られた居留地の地域を示す。大抵の人が大いなる興味を示す。そこでわたしはつづけて、それより右手のピンクに塗られた部分に注意をうながし、日本人の商会は居留地と区別されたこの区画にしか店を出すことができなかった、日本の中にありながら「Native Town」だなんて区別されて、屈辱的だが、この当時締結された外国との居留地条約はそれぐらい非常に不公平なものであった、日本政府はその条約を改正するためこのあと三十年もかかった、と説明する。

「日本政府は初めそのくらい屈辱的な特権を外国人に与えねばならなかったので、横浜はまさに植民地だったのだが、彼ら外国人のおかげでこの街ができたと思うと、われわれとしては複雑な気持だよ。とにかくこの街の外国ふうなところはみな、彼らに負っているのだからね。」

それから、古地図ではただ棒のように沖に突き出ているだけの桟橋を示し、これが当時の桟橋で、今のがあれだ、とふり向いて現在の大桟橋を見せる。道路を横切って「Yokohama International Port Terminal」と横看板のかかっているそのあたりは、なんとなく垢ぬけずごみごみしているが、よく見れば潮風にペンキの剝げちょろけた古い二階屋などが並んでいて、味がないわけではないのであった。

雅名を獅子文六（明治二十六～昭和四十四 一八九三～一九六九）といった岩田豊雄は、その父岩田茂穂が日本商人としては例外的に居留地内で絹物製品の輸出貿易を営んでいたので、幼少年期を横浜ですごし、昔の横浜についていろいろと思い出を書いている。その一つ「東京人を笑ったハイカラさん」という短文

に昔の波止場のことをこう思いだしている。

〈昔の海岸通りといえば、石畳が敷きつめられ、丸い白塗りの棒杭に鉄の太いクサリが続き、せいぜい高さ一間ぐらいの松が白い杭に沿って植えてあった。波止場――大桟橋――からグランド・ホテルの角まで、ここが海岸通りの行詰りだった。メリケン波止場は岸壁もなく、木の桟橋が海の中にポッカリ浮いて、両側に五、六千トン級の船と小さな船がつけばもう一杯、夜ともなれば禁止されている桟橋に手釣りの黒ダイ釣りがワッと押しよせ、整理しても絶えない風景だった。浴衣がけやシャツ姿で涼むような格好をしてマタの下から糸をたれる様は浜の風物詩だった。〉

獅子文六がここに記している時代は一九〇〇（明治三十三）年ごろだが、そのころになってもまだいかにものんびりしていた大桟橋のさまがうかがえる。

明治二十八（一八九五）年と三十四（一九〇一）年の地図を見ると、左右が懐にかかえこむようにのびている石積みの突堤が描かれ、木の桟橋はそこから沖へ突き出ている。地図には「イギリス大波止場」と記されているが、ハマっ子はメリケン波止場と呼んでいたのである。

それからずうーっと後になって昭和初めになっても、たとえば大佛次郎もこの波止場を「メリケン波止場」と呼んでいる。筆名大佛次郎（明治三十～昭和四十八／一八九七～一九七三）、本名野尻清彦も横浜の生れで、幼時を横浜で過した人だ。横浜を愛すること深く、『霧笛』を初め、横浜を舞台にした開化ものとよぶべき小説をいくつも書いているが、その『霧笛』を書いたころ（一九三三年）の思い出をこう語っている（「〝霧笛〟を生んだ波止場情緒」）。ちなみに彼はそのころ「仕事をするにもハマでないと気分がのらず」といい、ホテルニューグランドを常宿にしていた。三一八号室がその決りの部屋で、港が真正面に見え、実に住み心地のいい場所だったといっている。

〈「霧笛」を書いたのもこの当時でね。波止場近くの山下公園には夕方いつも散歩がてら出たものだ。ハマ独得の潮風の香をかぎながら〝ボーッ〟と低く、重く流れる汽笛を聞いているとなんともいえないね。とくに夏の夕方などは素敵に感じて、じーっと船を見ていたときもありましたよ。……

メリケン波止場には人力車がずらりと並んでいてね。下船したての外人客を乗せて市内をかけてゆく姿も散歩のときによく見かけたものだ。港だけがもつ国際的な町の活気と繁盛ぶり、それでいてどこか落ちついて静けさをもった小ぎれいな町が当時のハマだった。〉

大佛次郎が横浜の特徴としていうこの言葉は、前から言っているようにわたしもそう思っており、ぜひそれをなくさないでほしいと祈りをこめてこれを書いているのである。

横浜に越してきたばかりのころ、わたしはまだ四十代後半で体力もあり、客と野毛や福富町界隈でさんざん飲んだあとの最後の締めは、馬車道十番館かホテルニューグランドのバーで行うことにしていた。とくにニューグランド一階右手の「シーガーディアン」は、いかにも横浜にしかないような落着いたバーで、客の評判がよかった。奥行きが深く、過度の照明のしてない、地味なチェックの壁紙が張られた薄暗い空間に、がっしりした四本脚の四角いテーブルと頑丈な木の椅子がある。派手なところは一つもなく、静かで、イギリスのクラブはこうもあろうかというような落着いた大人の雰囲気をたたえていた。キャーキャー騒ぐ若者はおのずから来なくなり、中年以上の客がゆっくりと酒をたのしむところであった。値段も高くなく、酒にくわしいバーテンがいてよかった。

中野孝次・文　沢田重隆・絵
「西洋の見える場所・横浜」より

横浜チャイナタウン

いまから百三十二年前、横浜が開港すると中区山下町あたりは外国人居留地に定められて、欧米人たちは料理、裁縫、散髪や雑役の使用人として多くの中国人を伴ってきました。

それから十年あまりのちの明治四年には、日華修好條約が結ばれて中国人の日本への入国が自由になり、華僑の入国が急増しました。その数はたちまち当時の欧米人の二倍にもふくれ上ったそうです。

華僑とは―外国に移住した中国人とその子孫―を指しています。彼等は東南アジアをはじめ、サンフランシスコなどへも進出して、独特の華僑社会を築き上げていきました。海外に進出した華僑は結束が固く、適才に長けていることで知られています。横浜中華街は山下町の一画に、在日華僑が唐人町を形成したのがその起りで、いまでは一か所にまとまったチャイナタウンとしては、世界一の規模といわれます。

しかし度等も、いくたびか苦難の時代を経てきました。大正十二年の関東大震災では多くの中国人が犠牲になりました。また昭和十二年の日華事変ぼつ発の折は、本国へ帰国した中国人も多く、さらに第二次世界大戦の影響も受けています。

はじめ唐人町といった中華街は、大正から昭和にかけては南京町と呼ぶようになり、戦後ずっとこの名で通していました。戦後東京の食糧難時代に「南京町へいけばどんぶりめしが食べられる」といって、ひそかに南京町通いをしたという年配者の話も聞きます。

このころの中華街は道路も町並も、まだ整備がとどかず、裸電球が下がるような薄暗い感じでした。黒い木綿のチャイナドレスに身をつつみ、ひっつめ髪に纏足（てんそく・昔中国で女の子が生まれると子どものころから足に布を固く巻きつけて足を大きくさせないようにした風習）姿でよちよち歩く老婆の姿も見かけて、いかにも中国の庶民的な雰囲気を思わせていました。昭和三十年代でも中華料理店はわずか二十軒ほどを数えるに過ぎなかったといいます。

中華街が今日の発展のきっかけになったのは、昭和四十七年の日中国交回復が成立して、日本人の間に中国への関心が高まったことがあげられます。

中華街の表徴・善隣門

・コースを決めて

中華街は関内、山下公園、山手、元町方面からの中間地点で、歩ける距離にあり、予めその日のコースを決めておく方が、効率よくポイントを拾うことができる。東西南北の中華門の位置を確かめて、次のコースへ

関帝廟

華僑の住むところに関帝廟（かんていびょう）あり、といって、関帝廟は中国人の鎮守さまであり、中華街のシンボルにもなっています。

関帝廟の祭神関羽（かんう）は、中国三国時代漢の勇将で宋代以後は軍神として祭られました。そして宋、明、清時代の王室が守護神としたほか、一般にも信仰されました。中国の民間では老爺（ラオイエ）と呼び、契約を重んじる商人たちの間で財神として信仰されています。またわが国でも徳川光圀が京都大興寺に関帝を祭り、崇拝者のひとりだったといわれます。

横浜関帝廟は明治六年、中国の居留民が建立、関羽さまといって折々の暮らしの拠りどころになっていました。しかし創建の廟は関東大震災で焼失、その後再建されたものも第二次世界大戦と、昭和六十一年の火災で焼失してしまいました。

平成二年、関帝廟は、総工費六億円近くをかけて見事に完成しました。再建に当っては、とかく対立しがちだった中国系華僑と台湾系華僑も力を合わせて、多くの華僑団体からの支援もありました。

再建された関帝廟は、中国清時代の建築様式を取り入れて、中国建築美をほしいままにしています。急勾配の屋根、極彩色の木彫、中国産の漢白玉石を北京の古代建築専門家が加工したという欄干（らんかん）、高さ九メートルの豪華けんらんの構えです。

【関帝】

かんてい Guan-di

三国蜀漢の武将、『三国志演義』の英雄である関羽を神格化した民間信仰の主神の一つ。唐の韋提の「荆南節度使江陵尹裴公重修玉泉関廟記」（『全唐文』684巻）、宋の志磐の『仏祖統記』中の神霊譚から、関羽信仰が唐以前から湖北省一帯にあったことがわかる。関羽が劉備との盟約を果たせずに戦死したことに対する民衆の同情と、その神霊を畏怖することが、信仰の発生を促したようである。また、関羽の故郷山西省解県に伝わる悪霊蚩尤調伏の説話から関羽の伏魔的性格がうかがえる。霊験関羽が中国歴代の君主の心をとらえ、『蜀志』関羽伝に見られる称号の漢寿亭侯の上に、宋では忠恵公・武安王、元では顕霊威勇武安英済王の封号が加わり、明では、三界伏魔大帝神威遠鎮天尊関聖帝君という帝号がおくられた。清室は『三国志演義』を経典視し、関帝を関瑪法（関祖）と称して観音・土地神と共に尊崇した。また、三軍の師とも名づけて清室擁護の武神としている。外に、壮繆侯・協天大帝・山西夫子等の称号がある。関羽の祠廟は関帝廟の名で中国各地に存在し、中でも山西省解県の関帝廟の規模が大であり、湖北省当陽県と河南省洛陽所在の廟も有名である。また、台湾各地はもとより、東南アジア諸地域の華人街には関帝廟（協天宮ともいう）があり、大祭には、道士による祭礼が行われている。日本でも横浜・神戸等に廟宇がある。世界各地で経済活動をする華僑の関帝崇拝には、関帝が財神と呼ばれることと関連を持つが、地縁的結合になる会館の活動にも象徴される同郷の連帯が根底に存するようである。関帝と中国民衆とのつながりは、元雑劇から京劇その他の地方戯に至る関戯（関羽劇）の盛行にも伺える。関帝の『書』には『太上感応篇』『文昌帝君陰騭文』と共に『三聖宝訓』の一つにあげられる『関聖帝君覚世経』があるが、現在もアジア各地で読誦される『関帝明聖寶経』が有名である。また、清初の宝巻中に『銷釈万霊護国了意至聖伽藍宝巻』（鄭振鐸『中国俗文学史』下巻）があり、『道蔵精要』中に、『三界伏魔関聖帝君忠孝忠義寶経』を収める。

原田正己

【参考文献】井上以智為「関羽伝説の山東省における変遷」（『史林』26-1・2）、石橋丑雄「関帝」（『北支』山西省特輯号）、原田正己「関羽信仰の三三の要素について」（『東方宗教』8・9合）。

●——Theareh Guan

・華僑の関帝信仰風俗

関帝を守護神とする中華街華僑本来の関帝廟参詣の風俗は、春節祭（2月3日～4日）の前夜～深夜（大晦日に当る）ときに見ることができる

深夜条例のおかげで横浜の夜がアピールされた。本牧の外人バーには直輸入の音楽があった。中華街には美味くて安い料理があった。京急線ガード沿いには黒沢明『天国と地獄』の雰囲気があった。海岸通りはバタ臭く、波止場には自活映画そっくりの夜霧があった。

この時期、中華街は同胞相手の商売から、東京からやってくる客相手の商売に切りかわったのである。この流れが一九七二（昭和四十七）年の日中国交回復によって爆発する。

五木寛之『海を見ていたジョニー』が昭和四十二（一九六七）年春、彼が金沢から横浜に転居するのが昭和四十四年十月、歌謡曲の方ではいしだあゆみ『ブルーライト・ヨコハマ』が昭和四十三（一九六八）年、野江三奈『伊勢佐木町ブルース』も同年、五木ひろし『よこはま・たそがれ』が昭和四十六年、小説に歌に横浜を代表するこれらが出来たのは、深夜条例によって首都を見限った連中が夜の横浜に流れてきた約五年ののちであった。

▼明治維新に発行する開港期に、西洋商館の代理人および雇人として横浜にやってきた南京人（清国人）の検討。彼らは単純労働者ではなく、西洋商館から半独立した商人、技術者、職人である。

▼チャイナタウン形成期の検討。文久二（一八六二）年、居留地百四十番に小さな関帝廟が開かれたといわれ、これを以ってチャイナタウン形成の端緒とすることもできる。文久二年は生麦事件の年である。居留地百四十番は現在の関帝廟と同じ場所だ。慶応三（一八六七）年山手外人墓地の一角に中国人墓所が営まれる。中国人墓所はのち南区の地蔵王廟に移転。

▼慶応四（一八六八）年、「清国人墓参所」開かる。

▼明治三（一八七〇）年、「会芳楼」で写真上演。会芳楼は料理店兼劇場。

▼明治四（一八七一）年、日清修好条約締結。条約国民となった中国人は欧米人の買弁としてではなく、日本国内で独立して商売することができるようになった。関帝廟と媽祖と孟子を祭る会館と劇場という中国人のアイデンティティーをしめすものが明治三年までに揃ったのだから、チャイナタウンは成立している。

▼明治五（一八七二）年、マリアールス号事件。ペルー船に積みこまれた中国人奴隷を県令大江卓が解放、山下町に収容させる。西郷隆盛時代の建新期日本の理想主義のあらわれであるが、解放された同胞を支えるだけの力を横浜華僑社会は持っていた。この年、新橋―横浜間に鉄道開通。

▼明治二十二（一八八九）年、中国人口裁をめぐって日本人商人との間の紛争生じる。中国人の口裁とは、欧米商人と日本商人の仲立ちとして中国人がピンハネをすることだったが、日本側も西洋との交渉、貿易に慣れ、直取引ができるようになって中国商人の仲介を要しなくなった。これを以って中国人商人の特権的地位が失われ、買弁時代が終わる。ために中国人は製造販売業三把刀（料理屋・床屋の鋏と剃刀、洋服仕立鋏）に移行する。

▼明治二十七（一八九四）年、日清戦争。中国人を戦時敵性損民として扱う勅令発布。横浜の中国人人口激減。前年の三千四人が千八百八人に。

▼大正三（一九一四）年、第一次世界大戦。戦勝国側になった日本は不参戦の中国に対し対華不平等二十一箇条条約を要求し、ドイツ租界地だった山東省膠州湾を奪う。

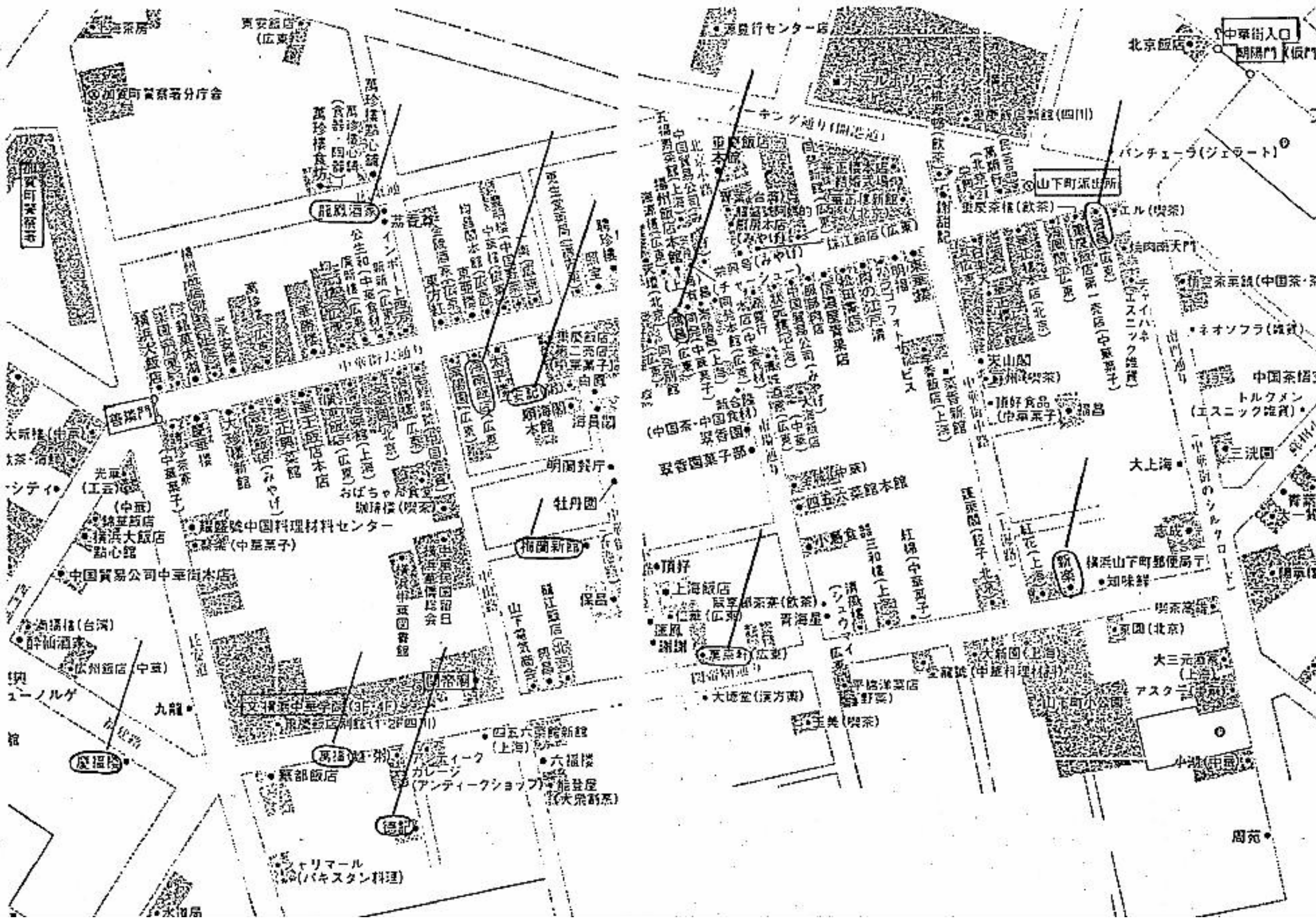
▼大正十二（一九二三）年、関東大震災。レンガ造りの中華街は壊滅的打撃を受け、中国人死者は千七百人余。神戸に避難した者は約四千人である。震災直後の朝鮮人虐殺も横浜ではことに激しかった。隣の鶴見町と横須賀では朝鮮人虐殺はない。横須賀は軍港であって軍隊が警備がしっかりかたまって朝鮮人が混乱にまぎれて非戸に毒を投げいれた等のデマは否定され、また朝鮮人を鳥舎に収容して保護した連隊長がおり、鶴見町では損殺の窓の避難行列が通りすぎた直後で警察官が沿道を固めており、デマに動かされず朝鮮人を保護した警察官がいた。それぞれ軍隊と警察が協働をもって固めていたから朝鮮人虐殺がなかった。横浜では日本人暴徒による中華街襲撃はなかった。東京ではあった。江東区大島で福州人労働者が殺されている。横浜華僑は東京華僑に救援の手をさしのべている。東京の中華民国総領事が同胞の遺物の下敷きになって死亡し、横浜華僑会館代表孔憲生が東京に赴き、副領事孫士毅を代理領事に立てることを要請、孫士毅は横浜で事後対策の業務を開始。また神戸華僑救援団が来浜。中国人遺族の収容と埋葬に着手する（横浜団という）というぐあいに、中国人の団結力はすばやく、また強い。

関東震災、日中戦争、太平洋戦争下の横浜チャイナタウンの動向は詳しくわからない。

中島敬は、この中華街にも好んで来たらしく「勝珍楼雑感」と題して、ここでの食事のたのしみを十四首の歌にうたっている。

うましもの唐の料理はむらざもの心のどかに食ふべかりけり
白く濃き唐菜スクプ湯気立ちてあら皆げやなうす脂うく
家鴨の若鳥の腿の肉ならむ香にとけ行くやはらかさはも
大き盤に漂々として湯気立つ何の湯（スップ）ぞもいざ味見せん
肉白き蟹の芝揚味程くうまし〳〵とわが食しにけり
かの国の人人のごとおほらけく食ずべきものぞ紅焼鯉魚は
冬の夜の羊肉の匂ふとかげば北京のみやこ思ほゆるかも
いさゝかに賤しとは思へどなか〳〵に棄てがたきものか酢豚の味も
みんなみの海に泳ぐる鯨の鰭に逢はで久しく年をへにけり

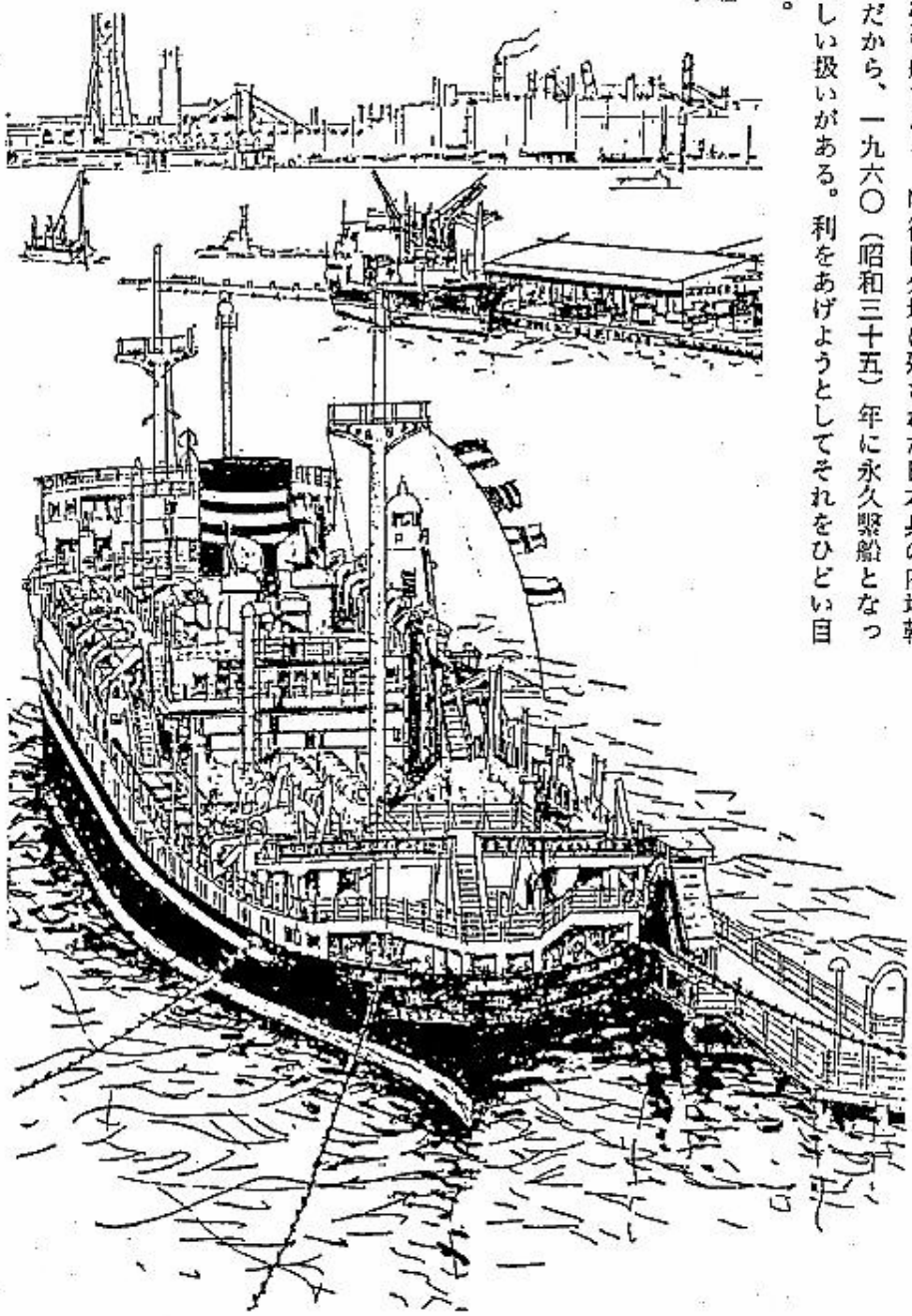
平岡正明著「横浜中華街謎解き」より



中華街入口
朝陽門
北京飯店
山下町派出所
パンチェーラ(ジェラート)
エル(喫茶)
ネオソフラ(雑貨)
トルクメン(エスニック雑貨)
大上海
三琉園
志成
横浜山下町郵便局
知味鮮
大新園(上海)
大三元酒家
山下町小公園
アスター
周苑
善隣門
中華街大通り
横浜大飯店
加賀町警察署分庁舎
加賀町警察署
萬珍楼點心舗
萬珍楼食坊
龍鳳酒家
耀盛號中国料理材料センター
中国貿易公司中華街本店
横浜大飯店
點心館
広州飯店(中華)
九龍
聘珍楼
牡丹園
明園餐庁
海員閣
保昌
頂好
上海飯店
翠香園
翠香園菓子部
四五六菜館本館
小島食器
市場通り
関帝廟
四五六菜館新館
(上海)
六福楼
能登屋
(大衆割烹)
アンティーク
ガレージ
(アンティークショップ)
シャリマール
(パキスタン料理)
玉美(喫茶)

この氷川丸は一九三〇（昭和五）年、すなわち山下公園が出来上ったとき横浜船渠（ドック）で建造された日本郵船シアトル航路の貨客船で、総トン数一万一六二二トン、一万トン級以上の船でたった一隻だけ太平洋戦争中に沈まなかった運の強い船である。戦後は外地に残された日本兵の内地輸送にあたり、さらにさんざん働かされたのだから、一九六〇（昭和三十五）年に永久繋船となったのは当然だった。名船には名船にふさわしい扱いがある。利をあげようとしてそれをひどい目にあわせては海の神の怒りを買うであろう。

中野孝次・文　沢田重隆・絵
「西洋の見える場所・横浜」より



赤い靴の女の子

赤い靴はいてた女の子
異人さんに連れられて行っちゃった
横浜の波止場から船に乗って
異人さんのお国へ行っちゃった

野口雨情の童謡「赤い靴の女の子」は、外国をまだ遠い異国としていたころ、子どもたちに悲しい女の子の身の上を思わせましたが、歌のモデルは実在したという話も伝えられています。

女の子の名はきみ。きみは岩崎かねという人の私生児として生まれ、アメリカの宣教師にあずけられて、アメリカへ渡ったことになっていました。しかし実際は麻布の孤児院に入れられて、わずか九歳の短い生涯を終えたというものです。

孤児院は東京の麻布十番あたり、近年ここにも赤い靴の女の子像が建てられました。

AKAI KUTSU NO ONNANOKO

青い目の人形

青い目をしたお人形は
アメリカ生まれのセルロイド
私は言葉がわからない
迷子になったらなんとしよう

これも野口雨情の童謡「青い目の人形」には、日米親善と、戦争悲話が秘められています。

大正初期、日本のカリフォルニア移民たちはあまりにもよく働きました。このため地元のアメリカ人たちは、土地を日本人に占有されてしまうのではないかというおそれから、排日感情が高まりました。

これを心配したシドニーさんは同十年、一万二千体あまりのアメリカ人形を、日米親善人形として日本へ贈ってくれました。人形たちはそれぞれの名を記したパスポートを持って横浜港へ着き、全国各地の小学校や幼稚園へ贈られたのです。

昭和二年、日本からもお返しとして五十八体の市松人形がアメリカへ渡りました。こうして日米親善に一役買った人形たちでしたが、昭和十六年第二次世界大戦がぼっ発して、悲劇の時代を迎えました。日本軍は青い目の人形を憎い敵といって、速やかに処分することを命じました。人形たちは焼き捨てられ、投げ捨てられたのです。

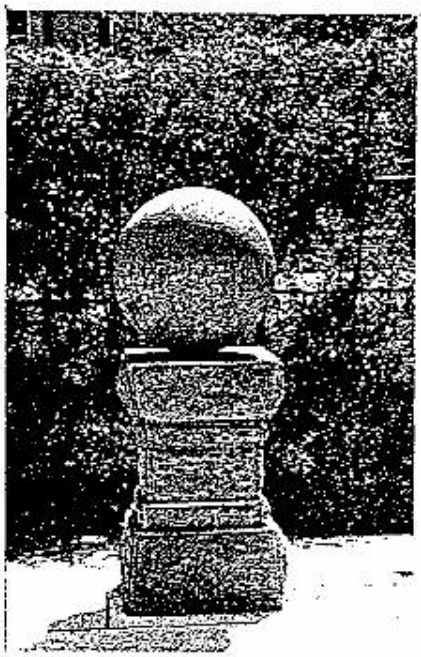
しかしこの中にあって、人形の命を救った人たちもありました。当時としては命がけのことです。

AOI ME NO NINGYŌ

日米和親条約調印の地

▶横浜市中区日本大通 〈→地 p. 92, 99〉
▶根岸線関内駅下車10分

関内駅から横浜公園をぬけ，わが国最初の近代的都市計画道路の日本大通りを大桟橋方向に行くと，B・C級戦犯を裁いた横浜地方裁判所があり，さらに県庁前には横浜開港資料館がある。同館は昭和56年6月に開館し，日本の開国，横浜開港関係の資料を集め公開展示している。この建物は1931（昭和6）年に建てられた旧イギリス領事館である。



日米和親条約調印の地の碑

開港資料館の隣りに，噴水を中心として波模様をデザインした石敷きの開港広場がある。その一角に地球を象どった日米和親条約調印の地の石碑がある。1853（嘉永6）年7月，ペリーの率いるアメリカ東インド艦隊の4隻の軍艦が三浦半島沖に姿を現わし，久里浜海岸で開国要求の国書が幕府に手交された。翌年2月，ペリーは再び来航し，開国に関する会談が久良岐郡横浜村字駒形（現県庁付近一帯）で行なわれた。ドイツ人の画家で，ペリーに同行してきたウィルヘルム＝ハイネの石版画などに，応接所の脇に大きな樹木が描かれているが，それは横浜村の漁師達が帰帆の目印とした玉楠の木で開港資料館の中庭にある玉楠はその2代目である。

1854年3月31日，日米和親条約12ヵ条が調印された。この間，アメリカ側から多数の品物が贈られ，特に電信機と模型の蒸気機関車は日本人を驚かせた。

開港広場にはレンガづくりのマンホールと卵形の断面をした下水管が保存されているが，それは1881（明治14）年から87年にかけて居留地一帯に下水道が整備された時のもので，広場工事中に発見された。

横浜開港資料館

江戸幕府は一六三九年（寛永十六年）、キリシタン禁制、オランダ人、中国人以外の外国人の日本来航禁止、日本人の海外往来禁止、貿易の統制強化などの、いわゆる鎖国体制を布きました。

この日本の国際的孤立状態は、江戸末期一八五八年（安政五年）の日米修好通商条約締結から翌年の横浜開港まで、二百二十年近い間つづいたことになります。

横浜は開港場になって世界へ窓を開き、いよいよ自由貿易がはじまると、横浜外国人居留地に見る街造りや生活様式に、また風俗にと欧米文化を吸収して、国際都市横浜への第一歩を踏み出しました。

横浜大桟橋入口近くに、開港ひろばと名付けた小公園風の休憩所があります。噴水、ミラー柱のデザインも面白く、広場を間にして横浜開港資料館と、シルク博物館（74ページ参照）があります。

開港資料館は海岸通りに面した新館と、中庭をへだてた旧館から成り立っており、旧館はもと英国領事館です。領事館は昭和四十七年に横浜での業務を終え、東京の英国大使館領事部に吸収されたため、建物の保存を横浜市に依頼したものです。

旧領事館の建物はイギリス工務省の設計、英国の古典様式を取り入れて、昭和六年に建造されました。石造りの重厚な外壁、正面両端に建てられたガス灯、さり気なく置かれたベンチ。クラシックな絵になる風景です。

また館内には記念ホール、記念室、会議室などがあり、記念ホールは領事館時代、来客の待合室に使われていたところです。横浜の居留地に住んだ外国人も、入国ビザを取得するためここに集まり、一種の社交場的雰囲気があったようです。ホール壁面には一八六五年（慶応元年）当時の横浜の町並の模型と、ペリー遠征航路図が見られます。

そしてまた、資料館のあたりは日米和親条約が結ばれた記念すべき地です。建物の保存を依頼された横浜市では、横浜開港結晶の地に、開港の歴史を物語る調査資料、研究資料を展示、意義深い資料館として公開したものです。

資料館の規模はさほど大きくはありませんが、ここには十五万点近い資料を収蔵、地下閲覧室では一般の閲覧ができます。

資料館展示室は新館の一、二階で、一階展示室は「開港への道・世界史のなかの日本」をテーマにしています。長い鎖国時代から解放された日本の中で、横浜開港の意味と役割を明らかにすることを目的としています。

展示室でまず目に付くのは、巨大な鉄製の地球儀です。これにめぐらせた帯には、産業革命、フランス七月革命、アヘン戦争、ロンドン万国博覧会、鼓隊丸出航、南北戦争など、世界の出来ごとの、浮彫画が施されています。

また鎖国から開国へと、日本が大きく変貌してきた様子を示すパネルと、錦絵、瓦版、ペリーの航海記録などがわかりやすく展示されています。

二階展示室は「街を語る・開化ヨコハマ」をテーマにしています。横浜は開港で世界へ道が通じると、貿易も活発に行われて、居留地も形成されました。欧米の文化、風俗は街造りに、人びとの暮らしにと取り入れられて、文明開化の波がどっと押しよせました。

二階のビニールタイルのフロアは、関内と山手を中心にしたカラータイルで分けられていて、フロア全体が市街地図になっています。この図は、明治十四年に、当時の内務省地理局が作成した、横浜実測図によるもので、現在の横浜もこの地図とさほど大きくは変わっていないということです。

そして天井から十四個の展示ケースが吊り下げられています。ふと気付くのは、これらが「横浜もののはじめ」、つまり横浜を発祥とした事柄を、その発祥地とする地図の上にセッティングしてあるということです。

この中で目に付くのは、日本最初のガス会社発祥の地、伊勢山下石炭蔵跡（44ページ参照）に作られた展示ケースです。

明治八年、横浜郵便局開業式に当って点灯された、花ガス灯の風景を描いた錦絵（三代広重画）をバックに、ガス燈台と、ガスストーブがセットされています。ストーブは鉄製ホーロー引き白木製のスケルトン型です。

このほか展示ケースは明治四十四年建造のレンガ造り三階建の横浜市役所、逐上所の荷物検査風景、居留地の商館などの模型が見られて、壁面の錦絵は文明開化当時の風俗を描いて楽しめます。

資料館の新館と旧館を分ける中庭に、「正橋の木」と記したタブの木が枝を重ね合っています。この木は江戸時代からここに植えられていたもので、日米和親条約締結もこの近くで行われました。

正橋の木は、大正十二年の関東大震災の折、幹の一部を焼失しましたが、残った株から再び芽ぶいて、現在の正橋に育ったということです。

横浜開港資料館（旧英国領事館）

ずっと保存されていた旧英国領事館が改修されて、昭和56年に開港資料館として生まれ変わった。入口は新館だが、領事館だった頃からのシンボル、正橋の木を見ながら中庭をぬけるとジョージアンスタイルの見事な旧館につながる。設計は本国、イギリス工務省、旧館の正面玄関を見上げると、コリント式の柱に囲まれてドーム形の天井が見える。地形のブロークン・ペディメントも見事だ。3階部分にはモダンなレリーフのついた円形の窓が。この階は使用人の部屋だったところ。玄関のドアノブもオシャレ。中に展示されているのは幕末から文明開化当時までの港に関する資料。

十四個の展示ケース。中の展示物もじっくりと見てみたい

☎201－2100　開館3時～16時30分　休月曜、祝日の翌日　入200円

開港記念会館

▶横浜市中区本町１－６〈→地 p. 92, 99〉
▶根岸線関内駅下車５分

関内駅から横浜市庁舎前を過ぎ，大桟橋方向に５分ほど歩くと県庁の手前に時計塔をもち，赤いレンガと白い花崗岩の混合積みが美しい調和をみせるネオ・ルネッサンス様式の建物がある。横浜市開港記念会館（国重文）である。1909（明治42）年，横浜開港50周年を記念して市民から寄付が集まり，それを基に東京市の技師福田重義の設計で1914（大正３）年に会館建設が着工され，1917年に完成した。地下１階地上２階建てで，建築当時は公会堂の他に貴賓室，商工会議所役員室・撞球室（ビリヤード）・食堂など62室あり，横浜の政・財界のサロンや文化施設として使用された。公会堂では演奏会や演劇などが東京公演に先がけて行なわれたという。

建物は関東大震災で一部が崩壊したが，昭和２年に再建された。内部にあるペリー来航時の黒船ポーハタン号や，駕籠に乗る外国人と和舟の渡しの風景のステンドグラスは開館当時のものである。敗戦後はアメリカ軍に接収され，メモリアルホールと呼ばれて婦人将校の宿舎や軍需品司令部となった。昭和33年に接収が解除された。

正面入口の左側に岡倉天心生誕の地の碑と隣りあわせに横浜商工会議所発祥の地の碑がある。この場所には1871（明治４）年まで生糸貿易商石川屋があったが，1874年４月に町会所が建てられた。町会所の建物はいわゆる横浜浮世絵にも描かれ，スイス製の電飾時計がはめこまれた時計塔のある建物で，横浜名所であった。横浜商工会議所は，1880（明治13）年にこの町会所で発足した。発足当時は横浜商法会議所といったが，昭和３年に横浜商工会議所と変更した。商法会議所は，生糸貿易商で初代会頭となった原善三郎や小野光景が福沢諭吉に助言を求め，それに基づいて外商を相手とする横浜商人の結束と自立をはかるために設立されたもので，記念碑は発足100周年を迎えた昭和55年に建立された。

岡倉天心生誕の地

▶横浜市中区本町１－６〈→地 p. 92, 99〉
▶根岸線関内駅下車５分

横浜市開港記念会館の正面入口の左側に，明治期に美術界の基礎を築いた岡倉天心（1862～1913）の生誕地を示す岡倉天心生誕之地の碑がある。大理石にブロンズの天心の肖像をはめこんだもので，題字は日本画家の安田靫彦，レリーフは新海竹蔵の作である。昭和34年5月に横浜開港100年を記念して建立された。

神奈川県立博物館

馬車道のシンボル、神奈川県立博物館は、銅葺八角形の堂々としたドームをのせた建物です。この建物はもと、横浜正金銀行本店（東京銀行の前身）として使われていたもので、博物館開館に当り、これに新館が増築されました。

ドームのある旧館は、五年の歳月をかけて明治三十七年に建造されました。ドームの造り、外壁に見る彫刻などにその歳月が思われます。ドイツルネッサンス風の旧館部分は明治の代表的洋風建築として、国の重要文化財に指定されています。

神奈川県立博物館は―神奈川の自然と文化を明らかにする―ことを目的とする総合博物館で、昭和四十二年に開館されました。

博物館正面から入ると、広びろとしたエントランスホールです。ここには大正十年ごろに高村光雲（光太郎の父）など、九人の彫刻家が製作して関東大震災にも難を免れたという神輿と、雌雄二頭の獅子頭が展示されています。またホールの正面に据えられた、中国明時代の三彩羅漢像と象牙彫刻の釈迦塔が目を引きます。

神奈川県立博物館

馬車道沿いにあるドイツルネッサンス様式の博物館。明治37年に旧横浜正金銀行本店として建てられた。柱はコリント様式が取り入れられ、柱頭飾りはつる草がモチーフになっている。正面に見える青銅のドームは関東大震災で失われたものを昭和42年に復元したもので、国の重要文化財に指定されている。ドームの下にはパックリと口を開けた魚の形をした飾りがついていてユニークだ。現在は改装のため休館中。数年後には美術や歴史などを中心とした人文系の博物館となる。☎201-0926

←歴史を感じさせる建物

これが明治建築史上、ドイツ派のリーダーだった妻木頼黄（つまきよりなか）の代表作で、日本人による西洋建築技術の一つの達成と見られる作品だった。妻木はこのころ東京府庁（明治二十七＝一八九四年）、東京商工会議所（明治三十二＝一九〇〇年）、日本勧業銀行（明治三十二年）、横浜正金銀行（明治三十七＝一九〇四年）とたてつづけに大作を完成させて、ドイツ派の力を世に示した。藤森照信『日本の近代建築（上）』（岩波新書）によると、「妻木頼黄のデザイン力はイギリス派とフランス派を凌ぎ第一世代の中ではトップにあった」ということで、この横浜正金銀行はドイツのバロック様式で、彼としては国会議事堂の習作をかねてつくったものである由。

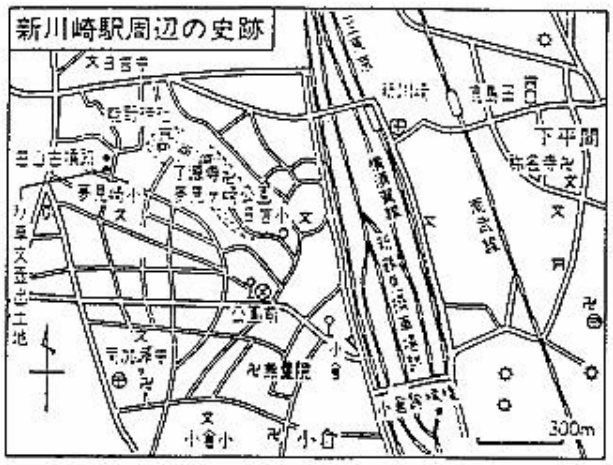
中野孝次・文　沢田重隆・絵

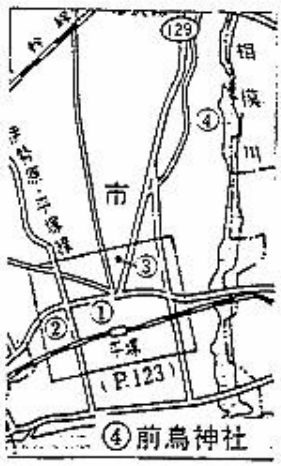
「西洋の見える場所・横浜」より

白山古墳跡

▶川崎市幸区北加瀬〈→地 p. 26, 27〉
▶横須賀線新川崎駅下車10分

夢見ヶ崎の台地の西に遠なるところに，開発によってほとんど消滅してしまったが，白山古墳という市内最大の前方後円墳があった。全長87 m。昭和11年に発掘調査を行なった際，三角縁神獣鏡・小形内行花文鏡・珠文鏡・乳文鏡・櫛歯文鏡・刀身・剣身・鉄器片・管玉・勾玉・小玉など豊富な副葬品が出土した。とりわけ中央槨から発見された三角縁神獣鏡は，中国の魏の時代（3世紀）につくられた，神仙霊獣が浮彫りに鋳出されたものだが，京都府大塚山古墳・山口県竹島古墳出土の三角縁神獣鏡と同笵鏡（おなじ鋳型を使用してつくられた鏡）で，大和政権と白山古墳築造者とのつながりをうかがわせる興味深いものである。





前鳥神社

▶平塚市四の宮723〈→地 p. 124〉
▶東海道本線平塚駅バス田村車庫行前鳥神社前下車3分

前鳥神社前のバス停で降りて少しもどって東へ行くと前鳥神社がある。祭神は，応神天皇の皇太子で仁徳天皇と位を譲りあった菟道稚郎子命で，彼が祭神となっている神社はめずらしく，関東ではここだけといわれている。菟道稚郎子命が百済の学者阿直岐や王仁に学問を学んだところから学問の神として尊敬を集めている。境内には，阿直岐・王仁・菅原道真の三神を祀った奨学神社がある。近くには大小の古墳が多くあるが，前鳥神社と関係のある有力者の墓であろうか。

この付近には18世紀後半の発祥と推定される相模人形芝居の前鳥座（県民俗）がある。戦後の一時期衰退したが，昭和31年に復活し，現在は平塚の七夕祭の期間中など年に何回か公演している。

神社の西側，国道129号線をこえた所に真土大塚山古墳があった。4世紀の初め頃の築造で相模川西岸の砂丘上でも最も高い所に位置し，京都の椿井大塚山古墳や岡山の東塚古墳と同じ神獣鏡が出土したが，現在は破壊されて何の面影もない。

明治のはじまりと馬車道

吉田橋に関門が設けられると（48ページ参照）、現在の馬車道と本町通りを結ぶ通りは主要道路になりました。一八六七年（慶応三年）には外国人の要請で、道路の拡張工事が行われ、松と柳（現在はアキニレ・秋になると紅色や淡黄色の小花が咲く）の街路樹も植えられました。

これもまた、日本ではじめてのことで、馬車道の入口に、近代街路樹発祥の地碑が建てられています。

馬車道の道路整備が終ると、外国人の乗った馬車の往来が目立つようになりました。人々はこれを「異人馬車」、「やぐら車」などと呼んで乗合馬車屋も開業、馬車道の名を生みました。

馬車屋は、一八六九年（明治二年）下岡久之助（蓮杖・れんじょう）はか、七、八名の共同出資で、吉田橋のたもとに、成駒屋の屋号で開業しています。下岡蓮杖といえば、これより七年ほど前に馬車道に写真館を開業したときされていますから、このころの事業家でもあったのでしょう。

またこれと同じころ、東京でも京浜間の馬車事業の許可願いが出されていました。このため成駒屋と共同出資の開業が認められて、馬車二十五台と馬六十頭が用意されたということです。

京浜間を走る馬車の発着所は、横浜は吉田橋、東京は新橋に置かれて、人力車で片道十時間かかっていたところを四時間で走ったそうです。しかし一八七二年（明治五年）、横浜、新橋間に鉄道が開通すると、陸蒸気が片道五十三分で走るようになりました。鉄道の開通で馬車は次第に廃業に追い込まれましたが、これも文明の発達による移り変わりということになるのでしょう。

鉄道が開通した同じ年、馬車道から現在の本町通りにかけて、日本最初のガス街灯が建ちました。近代道路と街路樹、そしてガス灯がともる風情は、いかにも文明開化の象徴を思わせたことでしょう。

ガス灯のはじまりは馬車道でしたが、外人居留地にガス灯がともったのは、二年後の明治七年のことでした。この背景には、日独社中の間のガス灯設置合戦がありました。そのとき日本側が優利を得たため、居留地では使用料などの話し合いがつかず、設置が遅れたといいます。（41ページ参照）。

↑エキゾチックな雰囲気が漂う馬車道

馬車道

横浜の開港とともに栄え、今でも当時の面影を色濃く残している馬車道。この辺りでは明治時代のモダニズムを肌で感じることができる。有隣堂文具館の前にあるのは太陽の母子像。明治2年に日本初のアイスクリームが売り出された場所だ。道沿いにはさらにガス灯発祥の地もある。ほかにもこの界隈には、ドイツルネッサンス様式の神奈川県立歴史博物館をはじめ、ネオルネッサンス様式、宝冠様式、コリント式など様々なスタイルの建物を見ることができる。

参考図書

○江戸東京湾事典　江戸東京湾研究会編　91・5　新人物往来社
○ぐるっと一周ベイエリア東京湾　94・1　日地出版
○西洋の見える港町・横浜　中野孝次著・沢田重隆絵　97・12　草思社
○横浜中華街謎解き　平岡正明著　95・9　朝日新聞社
○ー文明開化のみなとまちー横浜　柏原破魔子著　H3・10　アーバンコミュニケーションズ
○道教事典　野口鉄郎ほか編　94・3　平河出版社
○神奈川県の歴史散歩（上）　87・5　山川出版社
○JTBの旅ノート⑧横浜　97・6　JTB